No. 4（2011. 4）

武庫川女子大学
武庫川女子大学短期大学部

第４号

FDニュース

● 目　次 ●

〔１〕学科 FD の取組み
　　生活環境学科、生活造形学科
〔２〕FD 学生座談会
〔３〕平成22年度の授業公開を終えて
〔４〕第１期 FD 推進委員会活動報告書の刊行に寄せて
〔５〕シリーズ授業
〔６〕FD 豆知識
〔７〕編集後記

学科ＦＤの取組み

生活環境学科
生活造形学科　学科長　横川　公子

～生活環境学科・生活造形学科における FD の発掘～

健康管理は、意識的に行うことがコツだといわれます。意識的に行うためには、測ったり記録したりして、目には見えない身体の様態を見えるようにすることです。乗物で移動することの多い現代人が、適度に運動するためには歩くことが適っているといいます。この場合も、身体の使い方を意識して歩くほうが効果的だそうです。ところが日常的な習慣やルーチン的な行為は、身体の動かし方を格別に意識することなくやっているようです。生活環境学科が対象とする毎日の暮らしの探求と教育にも、よく似た仕組みの認識と仕掛けが求められると思います。

元来、大学で過ごすことが、そのまま学び研鑽することであり、大学教育に直結すると考えられてきました。これを飛躍的、かつ効果的に勧めるためには、さらに教育方法や学習法の可視化が有効なのだということになります。FD についての私の理解です。

生活環境学科は衣・住生活環境に焦点を当てていますが、全方位的に展開する毎日の暮しへの関心なしに独自な視座は成り立ちません。そのため教員には、専門的な知識や技術を身につけながらも、たえず視野を広く保って、生活全体、社会や世界全体の動きに興味を持ち続けていることが求められるでしょう。多くの領域から成り立つ当学科には、豊かな個性あふれる人材が集まっています。各自が自立してそれぞれのやり方で生活環境学の先端的な知を探究開発しながら、しかし決してバラバラになるのではなく全体でつながりあって、相互に活かし活かされていくことが目指されているのです。

但しくらしの探求は、既存の学問の領域とは必ずしも合致せず、パイオニアとしての多くの困難をともなう場合が多いのです。学科独自の生活環境学研究会では、日々の研鑽の成果を報告し、討論を深めあう仕組みをつくっています。さらに多様な成果を「学科情報誌」に集約し、可視化することで共有するようにしています。

入学直後の学生の学びを見えるかたちにするために、初期演習は、具体的で多様な試行を模索し実施する場になっています。短期大学部生活造形学科では、造形に関する基礎的エクササイズや地域文化の発見と紹介の冊子作成など。大学では学生の関心に基づく調査や読書リレー、ミュージアム・ボックスでの展示とカタログ作成‥‥等々。いずれも担任間の討議や学生と教員との共同作業による最近の実践例です。

授業は講義と演習、実験・実習で構成されています。多人数の概論とクラス分割による少人数の演習・実験・実習によって、学生はメリハリのある授業体験をします。現代はコンピューターグラフィックスやＣＡＤなどを導入した実習は不可欠です。しかし基礎的な学力やデザイン力の啓発には、手で線を引き、モノを観察し、じかに触れるというような原初的な体験、生の情報に触れることが重要です。学生の好奇心や動機を高めるためのフィールドや実物資料を体験する機会や仕組み作りをあらゆる機会に模索しています。また専任と現場経験の豊富な非常勤者とが共同で担当することで、設計や制作などの実務的な力を付け、同時に将来の社会参加のイメージにつなげるように工夫されています。非常勤の先生方の積極的で独自な参加が期待されています。

卒業研究は4年間の学生生活の仕上げです。その成果は、作品集や学科展、卒業制作展（短期大学部）、学会発表によって見える形で発信されます。

以上は、意識的な対応方法として取り上げられる学科ＦＤの一部です。のみならず、やる気を起こすためのノウハウは、学生と向き合い、微に入り細に入り展開される日々の教育現場に集積している筈です。

ＦＤニュース4号_0317.indd 1　11/03/22 10:13

初めての「ＦＤ学生座談会」を開催しました

FD 推進委員会は、授業改善に向けて様々な取り組みを行っていますが、学生たちは日頃の授業についてどのように感じているのでしょうか。FD ニュース編集委員会では、学生の生の声を聞くため、昨年12月16日（木）、「FD 学生座談会」を開催しました。学友会総務委員会の５名の学生と行った座談会の概要をご紹介します。

生活環境学科
2年
寺元　綾那 さん

食物栄養学科
2年
中鳥　明日香 さん

情報メディア学科
2年
中川　カンナ さん

FD 推進委員長
高橋　享子
（食物栄養）

■今まで受けた授業の中で、良かったと思う授業

寺元さん：私の学科では実習系の授業が多く、授業中に課題をする授業があります。授業で課題を出されると、学生は必死に取り組むので私語も少ないです。授業中に提出しなければならない課題があるのはよいことだと思います。

中鳥さん：授業中にポイントをおさえながら進めてくれる先生はわかりやすいと感じます。私には、パワーポイントよりも黒板を使って一緒に進めていくほうが合っています。最後にまとめをしていただくとさらに要点をつかみやすいです。

黒田委員：多くの先生はその科目での到達目標をシラバスで明示していますが，それだけではわかりにくいですか？

寺元さん：シラバスに書いてある内容は、学生が見てわかりやすいものとわかりにくいものがあります。まだ学習していない項目は、私達にはそれがどんな授業なのか見当がつきません。シラバスを見てわかって受講している学生はちゃんと学習できているように感じます。

中川さん：私は学びたいことがあってこの大学に入学したので、自分にとって良い授業とは学びたいことについてしっかりと教えてくれる授業です。科目を選択する際にシラバスを読みますが、実際に受講してみると思っていたものと異なることがあります。

村上さん：私が好きな授業では、「ここは書いてね」と先生が言ってくれて、書く時間もとってくれます。その授業は穴埋めのように空けてあるパワーポイントを使っていて、プリントがないのでノートに書きますが、書くポイントを指示してくれます。書く時間も十分とってくれて、「書けた？」と聞いてくださるので、書く量が多くてもわかりやすいです。皆集中していて、私語はありません。

黒田さん：私がよいと思う授業では、先生はパワーポイントを使っていますが，席と席の間を移動しながらレーザーポインタを使って皆に向かって説明してくれます。その先生は教室を歩きながら説明し、寝ている学生がいると「眠たいのはわかるよ。でも僕も頑張るから一緒に頑張ろう。」と言ってくれます。学生の気持ちをわかってくれ、頑張ろうと思えます。その先生は話もおもしろく、受講生は90名程度ですが、学生全体に問いかけてくれます。

中鳥さん：私の学科のある授業では、学生が全員授業に集中しています。先生からの問いかけが多く、学生にたくさん質問してくれます。その授業では小テストもあり、成績が先生の予想よりも全体的に良かった時には「皆よく頑張っています」と誉めてくれます。また宿題も評価に入れてくれるので、毎回頑張ろうと思います。

■私語が多い授業について

西尾委員：本学では昨年度より私語対策に重点的に取り組んでいます。私語が多い授業では、先生の教え方や授業内容についてはどうですか？

村上さん：２年生と４年生合同の授業では、４年生は単位が足りているからかよくしゃべっています。先生が、授業についての意見を出席カードの裏に自由に書くように言われるので、「４年生がうるさい」と書いたところ、先生は「４年生がうるさいと２年生が書いています。静かにしてください。」と言ってくれますので、静かになりました。先生が、学生の意見を代弁してくれたのがよかったと思います。

中川さん：大情では、座席指定の授業が多いです。学期はじめは自由でしたが、あれだけ私語が多かったら先生も授業にならないので。座席指定の必要な学科もあると思います。

■授業を受けていて、改善してほしいと思ったこと

黒田さん：前期にある語学の授業を受講しました。難しかったけど続けて頑張ろうと思い、後期にもその語学の継続科目を履修しましたが、前期と違う先生が担当でした。その先生の

ＦＤニュース4号_0317.indd 2　11/03/22 10:13

授業の仕方が前期の先生と全く違っていてとてもわかりにくいです。先生が変わって進め方が自分に合わなかったら、頑張ろうと思ってもうまくできず、自信を失ってしまいます。他の語学でも同じようなことがありました。

高橋委員長：やり方や進め方について、教員同士で話し合いがされていたらどうですか。前期の科目はこういうやり方で、後期の継続科目もレベルを上げながらこうやりましょうといった、科目間の連携です。

黒田さん：是非、話し合いをしておいてほしいと思います。先生の教え方云々ではなく、前後期でそろえて、授業の進め方に慣れていればわかりやすいと思います。特に、初期段階で教えてもらう先生の進め方は、大事だと思います。

中川さん：授業内容でシラバスとのズレがあったことに関連しますが、「〇〇の検定試験に有効」だけでなく、「将来こういう仕事に就きたい学生は履修すること」といったことがシラバスに添えてあれば授業選択がしやすいと思います。

高橋委員長：シラバスは、来年度から予習復習を含めた記述内容が加わりますが、明らかにシラバスと授業内容がずれている場合は、先生に指摘してもよいことになっています。シラバスには、授業内容と異なった勧誘的な表現はしないようにしています。

村上さん：成績評価が定期テストだけだとテストの時にすごくしんどいです。頑張って授業に出席しているので、普段の頑張りも多少含めてほしいです。小テストの時に先生が、この小テストは評価に入りませんと言われたら、やる気が少し下がります。

寺元さん：課題の評価の段階について、目安がわからないことがあります。ある授業では課題の基準がプリントで示されていますが、その基準が60点だとすると少し下手をすると不合格になるかもしれないので、それ以上の授業でやっていないことまでした方がいいかなと思ったりします。

中鳥さん：私の学科では実験実習の科目は毎回レポートがありますが、その判定を ABC で付ける先生もいますが、検印だけの先生もいます。私は、詳しく評価を返してほしいです。１年生の時のある先生は細かいコメントを書いてくださったので一番レポートを書きやすかった。レポートの書き方の指示も先生によって違うことがあるので、統一してほしいと思います。

高橋委員長：成績の評価方法は、シラバスに記載されており、先生はその通りに評価しなければなりません。出席の評価は大学では行わず、平常点の内訳に積極性などに置き換えて評価しています。先生は、初回授業で全体の流れと最後の成績評価について説明することになっています。

寺元さん：第１回目の授業で、内容や方向性についても説明があれば、食い違いが減ると思います。履修取り消し期間の関係で説明を聞けないこともありますが、先生によって差があって初日に授業のオリエンテーションをきちんとされる先生は少ないように思います。

■ *FD 活動について*

高橋委員長：今後、さらに本学の FD 活動を活発にしたいと思っています。よりよい授業のために、今回のように皆さんと話し合いながら、意見が聞ける機会を作りたいと思っていますが、年に何回位あったらよいですか？

中川さん：学生の意見を募集してもよいと思います。

黒田さん：授業公開は、先生から参観者があるので後ろの席を空けてと言われましが、誰も来られませんでした。

中鳥さん：授業公開をしている先生は、ヤル気も自信もあるのではないかと思います。授業公開は先生に広まって初めて、学生にも広まると思います。

90分という短い時間でしたが、参加してくれた学生たちと大変貴重な意見交換を行うことができました。各学科の事情によって方針や対応は異なっていますが、学生の皆さんの声を、今後の授業改善や本学 FD 活動の取り組みに活かしたいと思います。

（FD 推進委員　黒田　幸弘）

人間関係学科
1年
黒田　春陽 さん

心理・社会福祉学科
2年
村上　葵 さん

FD 推進委員
黒田　幸弘
（薬学）

FD 推進委員
西尾　亜希子
（共通教育）

座談会のようす

ＦＤニュース4号_0317.indd 3　11/03/22 10:13

平成22年度の授業公開を終えて

平成22年度は、本学で初めての「授業公開」を行ないました。委員会では、研究授業ではなく「普段行っている授業」を「気楽に公開」し、「気軽に参観」することを目的として取り組んできました。後期の授業公開コマ数は、全部で107コマと前期の61コマを大幅に上回りました（表参照）。公開していただいた先生の数も前期が24名でしたが、後期は50名と倍増しました。しかし、授業参観者数は大幅に減少し、委員会で把握できているのは10数名（前期は70名以上）でした。後期は、さらに授業や公務が多忙となるため、授業参観者が少ないことが課題となりました。今年度全体を見直しますと、公開コマ数は合計168コマ、授業担当者数は70名（実数）となりました。この数から見ても「気軽に公開」という目標は、十分に達成できたと思います。他の先生の授業を参観することは、「授業技術を学ぶ」ことであり、授業形態（講義・実習・演習など）や学生との双方向の展開方法などの授業改善への具体的なヒントが得られる貴重な機会と考えています。

平成23年度は、「授業公開」をもう少し「気楽に参観」していただけるよう工夫し、授業担当者と参観者の相互交流に繋がる取り組みを検討したいと考えています。

学科別公開授業数と担当者人数一覧

		共通	大日	大英	大教	大健	大心	大環	大食	大情	大築	大音	新薬	大康	短教	短健	短人	短食	短生	合計
前期	コマ数	3	1		33	4	7	2	7	1	1	1	1		6	3		1	1	61
	担当者数	2	1		5	2	2	2	6	1	1	1	1		2	2		1	1	24
後期	コマ数	1	3	5	10	8	4		4	16	1		43	12		4	7	3		107
	担当者数	1	1	2	2	4	1		3	11	1		18	6		3	1	1		50
H22年度	コマ数	4	4	5	43	12	11	2	11	17	2	1	44	12	6	7	7	4	1	168
	担当者数	3	2	2	7	6	3	2	9	12	2	1	19	6	2	5	1	2	1	74
	実数	3	2	2	6	5	3	2	8	11	2	1	19	6	1	3	0	0	1	70

（FD 推進副委員長　小野　賢太郎）

第1期FD推進委員会活動報告書の刊行に寄せて

学長　糸魚川　直祐
ＦＤ刊行物編集委員会

より満足度の高い授業をめざして～武庫川女子大学公開授業と実践事例報告に学ぶ～

本学では、平成20年度より FD 推進委員会を立ち上げ、２年間に亙り、FD 推進活動として主に「大学授業研究会」を開催して参りました。そこでは、本学初めての公開授業を含む３回の公開授業と、計10回24名の先生方から授業実践事例報告を行っていただき、参加された教職員同士が授業改善について話し合う素晴らしい時間を共有することができました。

FD 刊行物編集委員会では、この２月に、これらの成果を第１期 (平成20年度・21年度) の FD 推進委員会活動報告書『**より満足度の高い授業をめざして～武庫川女子大学公開授業と実践事例報告に学ぶ～**』として冊子にまとめ、教職員の皆様へお届けさせていただきました。授業改善への情熱と巧みな技法を紹介しつつ、同時に、そこに潜む問題点や課題等についても議論しています。

本報告書は、第１期 FD 推進委員会の第１プロジェクト「大学授業研究会」において、平成20年から21年にかけて行われました「公開授業及び授業事例報告 (HP 掲載記録)」を基礎データとして、これを FD 刊行物編集委員会ワーキング・グループが編集し、同委員会による校閲・承認のもと、このたびの刊行に至ったものです。「大学授業研究会」において、授業を公開または事例報告くださいました諸先生方、司会・記録・HP 掲載の労をおとりくださいました FD 推進委員の皆様、FD 推進活動をご支援ご協力くださいました教職員の皆様に、心から御礼申し上げます。

本報告書をご高覧賜り、今後のさらなる授業改善のための参考資料として積極的にご活用賜わりますとともに、本報告書内容につき、忌憚のないご意見賜りますれば、幸甚に存じます。

ＦＤニュース4号_0317.indd 4　11/03/22 10:13

シリーズ 授業

「昔もの作りのタイムトラベラー」

鑑賞授業並びに地域連携についての取り組み

教育学科
幼児教育学科　講師　山田　隆

「昔もの作りのタイムトラベラー」と題する「からくり人形」と江戸・明治時代の人々の智慧と技術の粋を集めた展覧会を開催した。 数年前勤務していた中学校校区での取り組みである。

右上の写真にあるように、指との比較からこの大きさが３センチにも満たない物である。世界最小の「からくり茶運び人形」で当時報道等の脚光を浴びた東野進氏（校区に在住、日本からくり研究会理事）の制作された人形である。

「からくり人形」は江戸時代の末期から明治時代の初めごろに多く作られた。このことは単に昔のことだと言うのではなく、この精巧な技術はまさに近代の日本の工業技術の発展の基礎となったものであり、その成り立ちは自然を熟知する事から生まれた智慧であり、暮らしの中に精神的な豊かさをもたらした文化である。この人形には、鯨のひげ、桐、桂、ほう、紫檀、の胴体、歯車、カム等適材が使われている。当時科学技術の発展がまだないとはいえ人々は自然と共に生きる中で培って生み出してきた証である。

東野氏の工房を訪ねた折に私も美術関係ということもあり話が進展、次代の子ども達に見せよう、伝えよう、関心を持たせたらと考え、お願いをしたところ快諾を得たのである。

さて､｢昔もの作りのタイムトラベラー｣からくり人形だけでなく､江戸時代から明治初期の収集品も展示できれば、と体育館満杯の作品が並んだのである。その中には20畳以上の天体図、解剖道具、エレキテル発生機、鉄砲、自転車の発達経緯（10数台）、仕掛け旅枕、等々数百点に及ぶものとなったのである。

更に、東野氏の友人である澤田平氏（鉄砲の専門家、何でも鑑定団出演）、玉屋庄兵衛氏（からくり師、愛知万博からくりプロデュース）の協力も得られるようになり、開催の２日間、３氏による「からくりの実演」等の講演を行ったのである。

２日間延べ800人程の参加者があり、上記の食い入るような表情の写真でも分かるように、子ども達や地域の方々と共有できたものは、珍しい物を見たのみでなく、人の崇高さと「もの作り」への関心であったのではと考えている。

ＦＤニュース4号_0317.indd 5　11/03/22 10:13

FD豆知識　単位制度とは　academic credit system

「単位制度」とは、標準的な学習時間をもとに授業科目を単位（unit）化して授業科目の履修毎に単位修得認定（credit）を行い、修了・卒業要件を、認定単位に基づいて設定する制度である。19世紀末のアメリカで誕生し、日本には大正後半期以後にいくつかの大学で導入され、新制大学における基本制度の一つとして採用された（『新版教育小事典』）。

設置基準では、1単位を45時間分の学習量と定め、講義・演習科目の場合は授業15～30時間、授業以外（準備学習や復習の時間）30～15時間の学習で構成するものとしている。例えば、前期2単位の講義科目の場合は、90時間の学習量となり、１コマ90分の授業を15週受ける。通常、大学では45分の授業を1時間とみなすので、総授業時間数は１コマ（90分＝2時間）×15週＝30時間となる。つまり、学生は、前期中に残り60時間分の準備学習や復習（自主学習）が求められており、教員もそれを前提とした授業運営を行わなければならないのである。

設置基準は、大学124単位、短大62単位を卒業要件の最低基準として規定するのみで、各大学が卒業要件としての単位数を独自に決め、卒業認定を行っている。しかし、現状では学期末の試験結果のみの単位認定や過剰な単位登録が看過され、単位制度のあり方が問題視されてきた。

このため、中央教育審議会は『我が国の高等教育の将来像（答申）』（平成17年1月）の中で、「単位の考え方について、国は基準上と実態上の違い、単位制度の実質化（単位制度の趣旨に沿った十分な学習量の確保）や学習時間の考え方と修業年限の問題等を改めて整理した上で、課程中心の制度設計をする必要がある」（第３章）と明記し、以来、各大学には単位制度の実質化が求められている。

昨年の全国調査では、全学生のうち週3～5時間以上を「授業の予復習や課題をやる時間」や「授業以外の自主的な勉強時間」に費やす学生の割合は、それぞれ26.6%、19.2% でしかない（ベネッセコーポレーション2010）。このような状況を踏まえ、本学では平成23年度から、シラバスに自主学習に関する課題を追記するとともに、試験以外に15回の授業を確保して、単位制度の実質化に向けた取り組みを行う。学習者中心の教育に対する組織的支援とともに、今後の FD 活動への期待が高まっている。**（FD 推進委員　西尾 亜希子、私市 佐代美）**

＜参考文献＞
大学基準協会年史編さん室編 (2005)『大学基準協会55年史 通史編・資料編』財団法人大学 基準協会刊
中央教育審議会（2005）『我が国の高等教育の将来像（答申）』
文部科学省 HP http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/05013101.htm
平原春好・寺崎昌男編（2002）『新版教育小事典』学陽書房
ベネッセコーポレーション（2010）「大学生の学習・生活実態調査　ダイジェスト版」
http://benesse.jp/berd/center/open/report/daigaku_jittai/dai/dai_11.html

編集後記

先日、医療系学科に勤務する知人との会話の中で、学生の髪の色のことが話題になりました。知人の勤務先に髪を金色に染めている学生がいて、医療人を目指す者の姿勢として適切ではないと指導をしたところ、一時的に髪が黒くなったが、しばらくするとまた金色に戻った、というものでした。この例は、「やろうと思えばできる」けれども「やりたくないからやらない」という典型例でしょう。しかし、読者の皆様もよくご存知のように、学生に「やりたい」「やらなければならない」と一旦感じさせると、その後はうまくいくことが多いようです。実際、医療現場を強く意識する高学年になると、髪が金色の学生はいなくなるそうです。就職活動と同じですね。この例とは別に、最近の学生は自主的に学習しない、自習時間が短いという問題がありますが、これも学生が「やりたくない」と考えている部分が大きいでしょう。シラバスの書き方を工夫して自主学習の方法を明示することは、学習量を増やすための手立ての一つにはなりますが、それだけで十分でしょうか。目標に到達したときに得られる成果を普段の授業の中で示すなど、継続的に動機づけを行っていくことや、学生の努力を認め、適切に評価することも重要となるでしょう。いろいろなアイデアを取り入れて、学生が自ら「頑張ろう」と思える魅力的な授業にしたいものです。　（編集委員 YK）

【FD ニュース編集委員会】
黒田幸弘、藤井達矢、西尾亜希子、私市佐代美、石田有紀

ＦＤニュース4号_0317.indd 6　11/03/22 10:13